風の末裔シリーズ・6th シーズンの６

# ～スカシユリ～

©西風そら

「まぁったく、貴方がドン臭いのは分かっているから、誰も責めやしないわよ。お昼返上でやったって大して変わんないンだから、休む時は休みなさい。ほら、行くわよ！」

相変わらず口の悪い黒髪のシータが連射弓の如くまくし立て、飴色の肌の娘は糸取り車から引っぺがされた。

養蚕小屋の入り口では、彼女の毒舌なんかには慣れっこの女性陣が、各々のお弁当を抱えてクスクス笑いをしている。

「大丈夫よ、カーリ。まだ始めたばかりだもの、そんなにすぐには上手くならないわよ」

口々に呼んで貰って、カーリは朝慌てて焼いた焦げパンを抱えて、皆の後ろに続いた。

三峰に来た時谷に残っていた雪はすっかり消え、山は春の若緑に変わっている。フウヤは狩猟の民に戻り、カーリはシータに勧められて、養蚕の手伝いを始めた。

蚕の繭から糸を絡めて絹糸を依る作業はとても難しかったし、次に教わる事になっている機織りなんて、目も眩みそうに複雑だ。砂の民の総領屋敷で、甘々な義父に与えられるだけだった細かい模様織りの絹なんて、何処かの特別なヒトが、魔法みたいに織りあげているんだろうと思っていた。それを自分がやる事になるなんて、冗談だとしか思えない。

「わあ!! シータ!!」

若い娘のグループで昼食を囲む芝の上。一人の女性の声で、カーリもそちらを見た。

シータが大きなレース編みを広げて、皆に見せている。百合の花束が真ん中に編み込まれ、その周りに沢山の小花が散らされた、見事な品だ。

「さすがシータね、すごい、この編み目！」

口々の誉め言葉に微笑みを返して、黒髪のシータはカーリに向き直った。

「貴方のよ、婚礼の儀式の時に被るヴェール」

「ええっ?!」

フウヤと生活を始めたカーリだったが、部落は春の種蒔きで忙しく、婚礼の儀は、春祭りの時に行われる事に決まっていた。

「本当は母親や親族が編む物なんだけれど、貴方の場合はここにいないから、私達で編む事にしたの」

「ホ、ホントに?」

「ええ、ホント。さ、真ん中は私の分担だったから、後は裾のモチーフを一段づつ。最初は誰が持って帰る?」

シータにレース編みを差し出され、娘達は顔を見合わせてもじもじした。

「あ、あのね…」

一人が代表するように口を開いた。
「貴方の編み目、あまりに綺麗なのよ。その下を私達が編むと、誰が編んでも変な段になっちゃう。勿体なくて…」
「…そういう品物じゃないでしょう?」
「でも…、ああ、ね、カーリもそう思うでしょ? シータの編んだ芸術品のヴェールをまといたいでしょう?」
「えっと…」
いきなり振られて、カーリは戸惑った。彼女に、娘達がシータの完璧な編み目の下に、自分の見劣りのする編み目をさらしたくない微妙な気持ちは、読める筈もなかった。
「ね、カーリ!」
「んと、んーと…」

「分かったわ」
助け船を出すようにシータが軽く言って、レースを畳んで片付けた。
「よし! では頑張りますか」
「出来上がりを見せて貰うの、楽しみにしているわ、シータ」
娘達はホッとして肩を降ろし、すぐに話題は別の事に移った。
カーリは何か引っ掛かる物を感じたが、この部落の空気をイマイチ掴んでいないし、シータが平気そうだったので、大人しく黙っていた。

それにしても……
養蚕小屋からのヘトヘトの帰り道、カーリはつい口に出して呟いた。
「シータって本当に凄い」
谷の地霊をやっつけたのだって、三峰の者なら誰でも出来るのかと思っていたら、他の部落人達は真っ青になって首を横に振った。きちんとした巫女に付いて勉強をしたシータだからこそらしい。狩猟の獲物に祈りを捧げる大切な役割も、長娘だからではなくて、彼女は部落の正式な巫女なのだ。
かと思うと、医師である祖父に習って、医術の心得もある。博学な父の蔵書に幼い頃から親しみ、古今東西の知識にも長けていた。その上、山百合のようにスラリと美しく、朗らかで誰からも信頼されて…。
「おまけにあのヴェール」
あんな神技のような模様編み、職人が集まる街の市場でだって見た事ない。
何でも出来て、太陽みたいにいつも皆の中心にいるシータ。自分みたいに落ち込んだりヘコんだり、つまらない事で悩んだりとか、しないんだろうな…。

＊＊＊

「ちょっとは手を抜けばよかったのにね」

窓辺でぼぉっとレース編みを眺めていたシータは、いきなり外から話し掛けられて、ビクッとなった。

「ヤン、子供の頃と違うんだから、気軽に覗かないでくれる？」

呆けていた顔を見られて、黒髪の娘はむっつりして立ち上がった。

昔から変わらない澄んだ瞳のヤンは、シータの言葉にお構いなしに、身を乗り出してレースを覗き込んだ。

「確かに、その編み目の下に編み足すのは勇気が要る。花嫁のヴェールって、一番に皆の目が行くからな」

ヤンの母親も養蚕小屋で働いていて、おかみさん仲間と輪になって、背中で若い娘達のやり取りを聞いていた。

「こんなの…、集中して丁寧にやれば、誰にだって出来るのに」

「皆は君と違うんだから」

「どう違うのよ、私だって初めから出来た訳じゃないわ」

「まあね、でも皆には分からないさ」

ヤンは一呼吸置いてから、背後に持っていたオレンジの花を掲げた。

「じゃじゃん!!」

「あっ!!」

「スカシユリ、尾根の岩場に咲いてた。あそこ、陽当たりがいいから、開いていると思ったんだ」

「すごいわ」

「欲しがってたろ」

「ええ、百合の雄しべの付き方が分からなかったの。これを、刺繍で足せば…」

「・・・・・・」

「何よ？」

ヤンがスカシユリを自分の目の前に当て、花弁の隙間から覗く仕草をしたので、シータは首を傾げた。

「君さ、そんな風に努力している所、ちょっとくらい皆に見せたら？　光の当たる隙間しか見せなくて、軽々こなしているように見えるから、頼られちゃうんだよ」

嬉しそうにしていたシータはたちまちむっつりに戻り、花を受けとると、窓に背を向けてしまった。

「ありがと、ヤン。私、これから編み物に集中するから、帰ってくださらない？」

「お礼にお茶位ご馳走してよ」

「言った事、分からなかった？」

「編んでりゃいいさ。勝手にやってるから」
ヤンはヒラリと窓を越え、勝手知ったる感じで、棚の茶器を引っ張り出した。
「君、濃いめだったよね」
「もお！」
シータは口を尖らせたが、本気で怒った風でもなく、ヤンの好きにさせていた。昔から、ちょっと年上のこの彼だけが、他の子供と違って、長娘の自分から一歩退かずに、ズケズケ踏み込んで来た。
そういえば、空飛ぶ馬を欲しがったり、しょっちゅう放浪の旅に出たり、部落の中では変わり者の部類だった。散々ふわふわしておいて、いつの間にか狩猟のリーダーに収まっているんだから、ちゃっかりしたモンだわ。放浪癖が抜けたのは、いつ頃だったかしら？

「花嫁のヴェールってさ」
考え事しながらレースを繰っていたので、ヤンが何か喋っていたのにようやく気付いた。
「えっ？　何？」
「ああ…」
ヤンは慣れた感じで言い直した。

「母さんがさ、花嫁のヴェールって本来は皆の祝福を込める物だから、大勢で編んだ方がいいのにって」
「……」
「娘達で話し合って決めた事だから、古参は口出ししないけれど…とか、ブツブツ。僕に言われてもねえ」
「……私に言われても困るわ…」
「うん、そうだね」
「ねえ、その話を続けるのなら、帰ってくれない？」
シータが手を止めてヤンを睨んだ。
「ごめん、もう言わない」
ヤンは殊勝に茶をすすり、シータは何だか集中を削がれて、溜め息を吐きながらカップを手に取った。濃い紅茶は頭が冴えるから好きだ。ヤンはいつも自分好みの、思いきり苦い紅茶を入れてくれる。

「シータ、いるか？」
扉がノックされて、イフルート族長の声がした。
「なあに？　お父さん」
シータは細くだけ扉を開けた。
別にやましい事はないが、殿方が窓から出入りしているなんて、彼女の作りたい彼女のイメージと違うのだ。

「親父の所へ行ってくれるか。フウヤが腹痛だと。薬を調合して欲しいらしい」
「またあの子・・、不摂生ばかりしているから」
シータは上着を取って、ヤンに目配せした。自分は出掛けるから、窓からそっと帰れ、の合図だ。
ヤンは黙って頷いた。

＊＊＊

シータが診療所から戻ると、夜半だった。
フウヤの腹痛は大した事なかったが、仕事場でのカーリの様子についてしつこく聞かれて、遅くなった。心配性なんだから、子供じゃあるまいし。でもまあ、彼女、大人しいから心配なんでしょうね。
部屋に入ると、当然ヤンはいなくなっていた。
「…??」
違和感を感じた。小机の上に畳んで置いたレースのヴェール、何だか…??
「何っこれ!! 酷いわ・・!! シータ?!」
養蚕小屋の前の芝生。お昼休みのお弁当の輪の中で、娘達が絶叫した。シータが鞄から出したヴェールが、トンでもない有り様になっていたのだ。
美しい編み目の裾に垂れ下がるように、同じ糸で紡いだとは思えない節だらけの糸の塊が、グルリとこびり付いている。編み目…編み目なんだろうが…こんな酷いの、見た事ない…。
「ヤンの仕業なの。私が留守の間に」
「ヤンが? イタズラにもほどがあるわ」
「酷い、シータの芸術品を。これ、ほどける?」
娘達は口々に同情の声を上げるが、シータは黙って、一つの言葉を待っていた。
「ほどかないで…」
黄色い非難の声の中、小さい声がやっと届いた。
振り向く皆の視線の先、今日も焦げすぎたパンをかじっていたカーリが、コブだらけの編み目を凝視している。
「嬉しい…」
呆気に取られる皆の間を、カーリは膝で這って、ヴェールの前に来た。
「ヤンもわらわを祝ってくれているんだ。あの武骨な指で…、どんなに大変だったろう。ほどかないで欲しい、シータ」
シータは満面の笑みを浮かべた。
「勿論だわ」

「あ、あら、私だってお祝いしたいわよ」
娘の一人がヴェールを手に取った。
「シータの力作を台なしにしたくなかっただけだもの。でも、既にここまで台なしになってしまったら、もう構わないわよね。この下に遠慮なく編み足させて貰うわ」
「だったら次は私よ。お祝いしたい気持ちはあるもの」
娘達が口々に言い、たちまち婚礼の日までのローテーションが組まれた。

昼休みが終わって仕事場へ向かう中、シータはヤンの母親にそっと呼び止められた。
「ごめんなさいねぇ」
また背中で聞き耳を立てていたのだろう。
「あの子、昨日、急にレース編みを教えろって。生まれてこの方そんな事した事ないから、まともに出来る訳ないのに」
「いいえ、あそこまで苦い編み味を出せるヒト、そうそういません」

夕刻…
桑畑の道を歩くカーリの後ろから、白い青年が駆け寄った。
「呼んでたのに、聞こえなかった？」

「ごめん、フウヤ」
「何？　考え事？　パンを焦がさないで焼く方法とか？」
「ううん、レース編み…。そうだ、フウヤ、レース編み出来る？」
「無理！　僕の繊細な指は、粘土ベラを持つ為にある」
「・・・・・」
「習いたいんなら、シータが一番だよ」
「…うん、でも…」
「どしたの？」
「シータの婚礼の時は、わらわもヴェールを編んであげたいと思ったんだ。だから、シータに内緒で上達しておきたくて」
「ああ、そうだね、うん、それはいい心掛けだ。んーと・・・あっ、糸玉夫人って名人がいる！」
「分かった、じゃあ、今晩行くから、紹介して」
「えっ？　今晩？」
「何となく、気が急いて」
「そ、そう？」
「思い立ったら吉日っていうだろ」
「・・・・・」
まったく…、だから天然天使だってんだ。
自分に触発されたか、永遠の相棒も、そろそろ積年の想いに決着を付ける心づもりのようだ。

彼が旅に出るのを止めた理由も、真面目に狩りを頑張り出した理由も、部落の勘のいい者なら、概(おおむ)ね気付いている。
知らぬは、かの女性のみ…。

その、かの女性の婚礼時のヴェールには、たどたどしい雪の結晶模様の下に、粘土ベラで編んだようなぶっ細工な一段が挟まっているであろう事は、多分おそらく間違いない。

～おしまい～

二〇一一・九・二十一